

身近なまちの風景物語(38)

そよぐ誘惑

道を歩くと、風に揺れる暖簾に目が向く。店先にかかっていれば営業中の合図だ。揺らめく暖簾が誘っている。おいしい匂いや香りが鼻腔をくすぐればなおさらだ。

暖簾は日本独特のものという。日差しや風、人目をよけるため、家屋などの開放部にかけてきた。

布の暖簾に文様が施されるようになると、商家が独自の意匠を入れるようになった。モノの形、屋号や記号、そして江戸時代に入り識字率が高まると、文字も入るようになった。暖簾がその店の看板という機能も併せ持った。かつては約束事として、業種によって基本となる色も決まっていたという。

現在では店構えに応じてさまざまな大きさ、形状、材質、デザインの暖簾が掲げられている。ただし暖簾をかける竹などの棒を入れる形状は大きく二分される。棒を入れる布地を輪にして縫い付けるタイプと布地の上部を袋縫いするタイプがある。前者は棒が

見える関東風、後者は棒が見えない関西風ともいわれ、文化の違いに置き換えられている。

物理的に越えられない壁ではなく、視界を妨げる扉でもない。視覚的にわかりやすく、空間を優しく区切る仕掛けだ。

扉が開いていれば、暖簾の下から先客がいるかどうかを窺い知れる。暖簾の切れ目に手を入れて店の中を覗く。気に入れば入店し、そうでなければ立ち去る。しなやかで軽い存在だ。

暖簾をかき分け、少し頭をさげ、あるいは前かがみになって店の中に入る。普通に店内に入るという行為に比べ、暖簾をくぐるという身体性を帯びる。そこに特別感がある。別世界への入り口だ。

固いまち並みに、緑花や暖簾は動きを与えてくれる。柔らかく、そして軽やかにそよぐ動きに心地よい風を見る。目も、足も誘われる。

野中 勝利

筑波大学 大学執行役員 芸術系長 教授



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程2年）